

卒業論文最終草稿

「移民と地域との関わりについて」

-スイスに暮らす日本人移民へのインタビューを通じて-

塩原良和研究会 2019/2020

31760551

日比野亘平

慶應義塾大学法学部政治学科4年H組

## 目次

### 第1章 はじめに

- 1.1 研究の背景
- 1.2 研究の目的・方法
- 1.3 本論文の構成

### 第2章 スイスの移民について

- 2.1 スイスに暮らす移民の概要
- 2.2 スイスにおける移民の歴史・政策

### 第3章 スイスの日本人移民について

- 3.1 海外に暮らす日本人の数・種類
- 3.2 スイスに暮らす日本人の数・種類

### 第4章 インタビュー調査について

- 4.1 インタビュー調査の概要
- 4.2 インタビュー調査の詳細
- 4.3 インタビュー調査から見えたこと

### 第5章 終わりに

### 参考文献

# 第1章 はじめに

## 1.1 研究の背景

現在の日本は数多くの問題を抱えているが、特に少子高齢化が進んだ日本においては労働者人口が足りなくなり、外国人労働者の積極的な受け入れが必要になる。2018年12月には国会で外国人労働者受け入れの拡大のために新たな在留資格を盛り込んだ出入国管理法改正案が可決され、今後の日本ではより多くの外国人労働者やその家族が日本にやってくる事が予測される。その一方で、「いまだに包括的な移民政策、とりわけ統合政策の構築には至っていない」（李,2017）のが現状である。また、外国人労働者に対する国民の抵抗感が強いことも否めない。このような状況下において日本人と外国人が共生していくために、政策として統合を行っていくことはもちろんであるが、地域レベルでの共生に取り組むことが必要であると私は考えている。

本論文では、私が2019年3月から2019年6月までの4ヶ月間にスイスのベルン州にて実施した日本人移民家庭19組を対象としたインタビュー調査を踏まえながら、スイスにおける外国人住民と地域住民の関わり方を俯瞰し、移民がどのようにして地域に溶け込んでいるのか、もし溶け込めていない場合はどのような理由があるのかを探っていく。

本論文において、参考事例としてスイスを選んだ理由としては2つの点が挙げられる。1つ目は人口の4分の1以上を外国人が占めている<sup>1</sup>ことだ。2点目は、イギリスに拠点を置く金融大手HSBCが毎年行っている海外駐在員の生活レポート調査（原題「Expatriate Explorer Survey」）において、生活の質や、政治的安定性、所得、経済的安定性、教育機会などの部門で上位を獲得し、総合ランキングで2年連続1位を獲得している<sup>2</sup>ことだ。これらの特徴を踏まえると、外国人の数が多く、彼らの生活の満足度が高いことが言えるが、なぜそのような状況となっているのか探りたいと考えた。

## 1.2 研究の目的・方法

本論文では、スイスがどのような移民の歴史を持ち、現在移民に対して取り組んでいる政策にはどのようなものがあるのかをみると同時に、スイスに暮らす日本人へインタビュー調査を行うことで、スイスでの移民の生活の実態を探っていく。

---

<sup>1</sup> [https://www.swissinfo.ch/eng/migration-series-part-1-\\_who-are-the-25-foreign-population-in-switzerland/42412156](https://www.swissinfo.ch/eng/migration-series-part-1-_who-are-the-25-foreign-population-in-switzerland/42412156) (2020年1月3日閲覧)

<sup>2</sup> <https://www.expatriateexplorer.hsbc.com/survey/country/switzerland/chart:table> (2020年1月3日閲覧)

今回のインタビュー対象を日本人に絞ったのは、スイス国内において日本人は他のヨーロッパ出身の人たちと比べるとマイノリティであること、日本人以外の人に調査を行うことの壁が高かったためである。

### 1.3 本論文の構成

本論文の構成は以下のようになっている。第2章では、スイスにおける移民の数や国籍について概観すると共に、スイスの移民の歴史や現在取り組まれている外国人政策について述べ、第3章では、海外に暮らす日本人とスイスに暮らす日本人にどのような傾向の違いがあるのか見ていく。第4章では、スイスにて実際に行ったインタビュー調査についてまとめ、そこから見えることについて述べる。

## 第2章 スイスの移民について

本章では、スイスにおける移民の数や国籍について概観すると共に、スイスにおいてどのような外国人政策が取り組まれているのかについて見ていく。

### 2.1 スイスに暮らす移民の概要

まずはスイスに移民がどの程度いるのか、そしてそれが人口の何割程度を占めているのかについて述べていく。

スイス連峰統計局のデータによれば、スイスの人口は約 860 万人おり、そのうち移民は人口の約 4 分の 1 となる約 211 万人いる。ほかのヨーロッパの国で外国人人口が 20% を超えている国は、Eurostat が発表している 2018 年のデータによればルクセンブルクやリヒテンシュタインの 2 カ国のみとなっている。

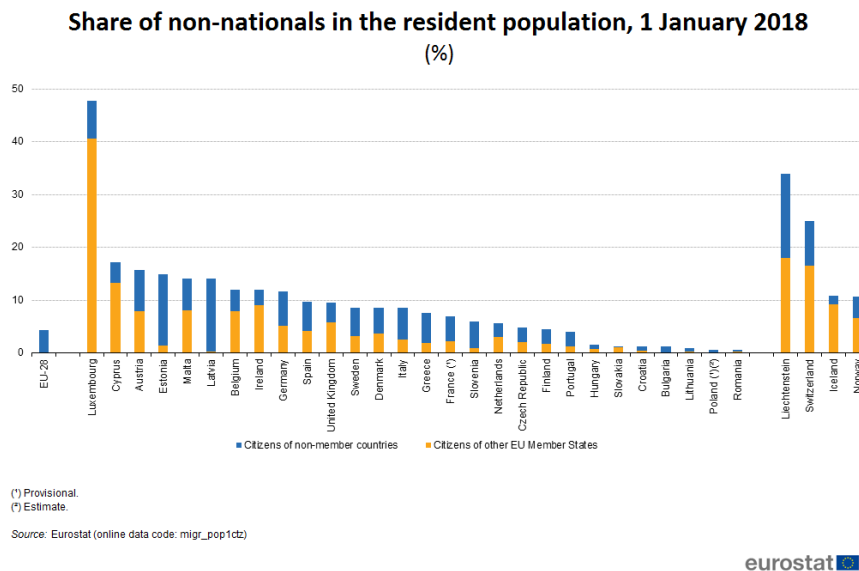


図 1 ヨーロッパ各国の移民割合<sup>3</sup>

<sup>3</sup> [https://ec.europa.eu/eurostat/web/products-eurostat-news/-/ddn-20190315-1?redirect=%2Feurostat%2Fweb%2Fpopulation-demography-migration-projections%2Fpublications%3Fp\\_id%3Dcom\\_liferay\\_asset\\_publisher\\_web\\_portlet\\_AssetPublisherPortlet\\_INSTANCE\\_zvpDObsPlwT5%26p\\_p\\_lifecycle%3D0%26p\\_p\\_state%3Dnormal%26p\\_p\\_mode%3Dview%26\\_com\\_liferay\\_asset\\_publisher\\_web\\_portlet\\_AssetPublisherPortlet\\_INSTANCE\\_zvpDObsPlwT5\\_delta%3D5%26p\\_r\\_p\\_resetCur%3Dfalse%26\\_com\\_liferay\\_asset\\_publisher\\_web\\_portlet](https://ec.europa.eu/eurostat/web/products-eurostat-news/-/ddn-20190315-1?redirect=%2Feurostat%2Fweb%2Fpopulation-demography-migration-projections%2Fpublications%3Fp_id%3Dcom_liferay_asset_publisher_web_portlet_AssetPublisherPortlet_INSTANCE_zvpDObsPlwT5%26p_p_lifecycle%3D0%26p_p_state%3Dnormal%26p_p_mode%3Dview%26_com_liferay_asset_publisher_web_portlet_AssetPublisherPortlet_INSTANCE_zvpDObsPlwT5_delta%3D5%26p_r_p_resetCur%3Dfalse%26_com_liferay_asset_publisher_web_portlet)

スイスに暮らす外国人を出身地域別に見ると、ヨーロッパ大陸が 180 万人ほどで全体の 8 割以上を占めている。その他の地域としては、アジアが 13 万人ほど、アフリカが 9 万人ほど、アメリカが 8 万人ほどとなっている。出身国別に見ると、多い順にイタリア (32.3 万人)、ドイツ (30.9 万人)、ポルトガル (26.3 万人)、フランス (14 万人)、コソボ (11.4 万人) と続いている。このように、移民のほとんどがヨーロッパ、特に周辺国から来ていることがわかる。

## 2.2 スイスにおける移民の歴史・政策

スイスは古くより人々の「避難先」(花田, 2018) と位置付けられており、多くの移民や難民をこれまでに受け入れてきている。古くは 17 世紀にナントの勅令の廃止に伴ってユグノーと呼ばれる新教徒がスイスへ何を逃れるためにやってきている。ちなみにこの時にやってきたユグノーたちの技術力によってスイスの時計産業の礎が築かれた。第二次世界大戦前になると、ナチスによる迫害から逃れるため、多くのユダヤ人がドイツからスイスにやってきた。しかし、川口 (2018) によればユダヤ人亡命者の数が増える中で、スイスの国民はスイスのユダヤ化を懸念すると同時に、職が奪われてしまうことを恐れるようになった。そしてスイスはユダヤ人の入国を全面的に拒否するようになった。第二次世界大戦が終結すると、スイスは戦禍によって荒廃したヨーロッパの中で裕福な状態を保つことができていた。そこにイタリアからの移民が押し寄せた。その後、経済成長に伴って雇用が増加し、1951～70 年にイタリアを含め、スペイン、ポルトガルといった国からスイスへ移民が押し寄せるようになった。1973 年に第一次石油ショックが起これると、スイスは外国人労働者の受け入れ枠を設定し、新規外国人労働者を制限する方針を採用した。戸田 (2008) によれば、これによって新たに入国する外国人労働者の数は減少したものの、既にスイスに滞在していた外国人労働者が祖国から家族を呼び寄せたため、外国人人口は増加した。その後景気は回復したが、1991 年には、EU・EFTA 国民以外の未熟練労働者の受け入れを制限するようになった。しかし、1990 年代のユーゴスラビア紛争によって大量のユーゴ難民がスイスに押し寄せるようになった。花田 (2018) によれば、戦後にやってきたラテン諸国からの移民とユーゴ難民には差があったという。ラテン諸国からの移民はスイスにとってさほど異質な存在ではなかった。地域差はあったものの、スイスは彼らに対して好意的であり、スイス政府の同化政策のもとでスイス社会に順応していった。その一方で、ユーゴ難民は手に職を持っていないものが多く、スイス社会にとって異質な単純労働者となってしまった。そして 2000 年代になるとこのユーゴ難民に加えてイスラム圏の移民が増えていった。現在のの

---

[let\\_AssetPublisherPortlet\\_INSTANCE\\_zvpDObsPlwT5\\_cur%3D8%E3%80%80](#)  
0 より引用 (2020 年 12 月 27 日閲覧)

ヨーロッパではポピュリズムの台頭が顕著となってきた。スイスもこの流れには逆らっていない。2000年代以降、国民党の躍進が続いている。2020年の国民投票では、否決されたものの、「移民制限」に関するイニシアチブがあった。これは、「EUからの移民が今後も制限なく増加することにより、国内労働市場や公共サービス、社会が被る影響を懸念して、EUと締結している『人の移動の自由』の破棄を求める提案」（JETRO, 2020）であった。

現在のスイスで行われている移民政策を見ていく。まず、スイスでは移民に対して短期滞在許可（Kurzaufenthaltsbewilligung, Permit L）、滞在許可（Aufenthaltsbewilligung, Permit B）、定住許可（Niederlassungsbewilligung, Permit C）、越境労働者許可（Grenzgaengerbewilligung, Permit G）の4種類の滞在許可証を与えている。同伴家族や定住資格者（Permit C）については、2019年1月に「外国人統合法」が改定され、EU又はEFTA以外の国からやってくる者に対して居住地及び就労地の公用語に関する語学要件が課されることになった<sup>4</sup>。柿原（2020）によれば、スイスでは近年、移民の受け入れ政策について、社会統合をめざす方針がより明確に示さるようになっており、上記の外国人統合法の改定もその影響を受けたものである。この改定によって、外国人が滞在許可を申請する際に、公共の安全と秩序の尊重、憲法の価値の尊重、言語能力、経済活動への参加または技能訓練を受けていることなどが要件として求められるようになった。ただし、スイスは連邦国家であり、各カントン（日本の都道府県に相当）毎の権限が非常に強い国である。そのため、スイス全土で全く同じ移民受け入れ政策や統合政策は行われていないことには注意する必要がある。

このようにスイスは歴史的にこれまで多くの移民難民を受け入れてきた。ただし、これらは無条件に受け入れられてきたのではなく、経済状況や国民感情などが反映されながらの受け入れであった。そして、近年移民や難民の数がこれまで以上のペースで増えていく中で、柿原（2020）もし適しているように、難民や移民に対する世論は厳しさを増してきているのが現状だ。

---

<sup>4</sup><https://www.ch.emb-japan.go.jp/files/100027781.pdf>（2021年1月10日閲覧）

## 第3章 スイスの日本人移民について

本章ではスイスの日本人移民について、ヨーロッパを含めた他の地域に暮らす日本人と比較することで特徴を探ると共に、カントンごとの滞在許可別の日本人数を見ることで、次章で取り上げるベルンに暮らす日本人がどういった立ち位置なのかを見ていく。

### 3.1 海外に暮らす日本人の数・種類

本章では、スイスに暮らす日本人は他国に暮らす日本人と違いがあるのか、もしある場合はどのような違いがあるのかについて見ていく。

外務省「海外在留邦人数調査統計」によれば、2019年10月1日現在、在外邦人数は141万0356人となっており、統計を開始した1968年以降最多人数となっている。地域別に見てみると北米が全体の約37%を占めており、アジアが約29%、西欧が約16%と続いている。国別に見るとアメリカが全体の約31%を占めており、中国が約8.3%、オーストラリアが約7.4%と続いている。この人数は在留期間が3ヶ月に満たない旅行者等短期滞在者を除外した、「永住者」（在留国から永住権を認められ、生活の本拠を海外へ移した人）と「長期滞在者」（3ヶ月以上の海外在留者のうち、海外での生活は一時的なものでいずれは日本に戻るつもりの方）、日本国籍を有する重国籍者などから成り立っている。

在外邦人の滞在目的としては、永住者が48万4150人、長期滞在者が86万7820人となっている。また、長期滞在者の内訳としては多い順に民間企業関係者（46万3700人）、留学生・研究者・教師（18万0406人）、その他（14万8651人）、自由業関係者（4万8785人）、政府関係者（2万2659人）、報道関係者（3619人）となっている。そして、永住者と長期滞在者の各種別の人数を地域毎にまとめたものが図2である。

これらのグラフを見てみると、先進国が比較的多い地域や南米は「永住者」の割合が多いことが特徴として挙げられる。特に、先進国が比較的多い地域では「留学生・研究者・教師」の割合が他の地域よりも多いことがわかる。その一方で、発展途上国が比較的多い地域では「民間企業関係者」の割合が高く、特にアフリカでは他の地域と比べて政府関係者の割合が非常に高いことが読み取れる。



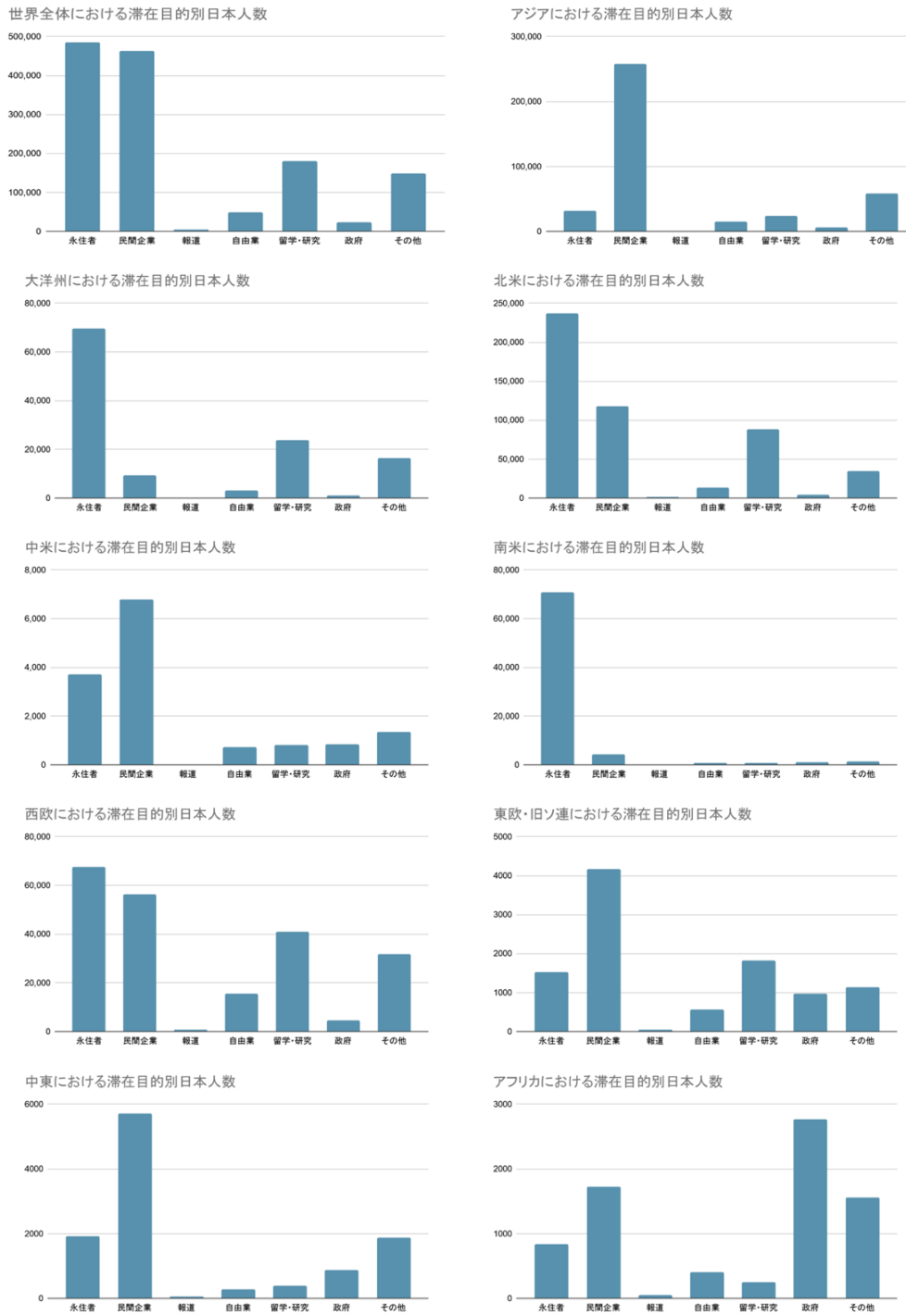


図 2 世界の各地域における滞在目的別日本人数  
 出典：外務省『海外在留邦人調査統計』より筆者作成

### 3.2 スイスに暮らす日本人の数・種類

では、スイスに暮らす人たちは西欧や他の地域における滞在目的別日本人数の割合とどのような違いがあるのだろうか。スイスに暮らす日本人の数は外務省「海外在留邦人数調査統計」によれば、2017年10月1日現在で、1万0827人である。そのうち、永住者は5580人、長期滞在者は5247人となっており、その内訳としては、多い順にその他（1,834人）、民間企業関係者（1300人）、留学生・研究者・教師（1051人）、自由業関係者（549人）、政府関係職員（497人）、報道関係者（16人）となっている。スイスにおける滞在目的別日本人数と西欧における滞在目的別日本人数を比較すると、スイスの方が永住者や政府関係職員の割合が高く、西欧全体の方が民間企業や留学生・研究者・教師の割合が高いことがわかる。これはスイスに日系企業がそれほど多くないこと、ジュネーブに国連をはじめとした政府関連の施設が集まっていることが原因であると考えられる。

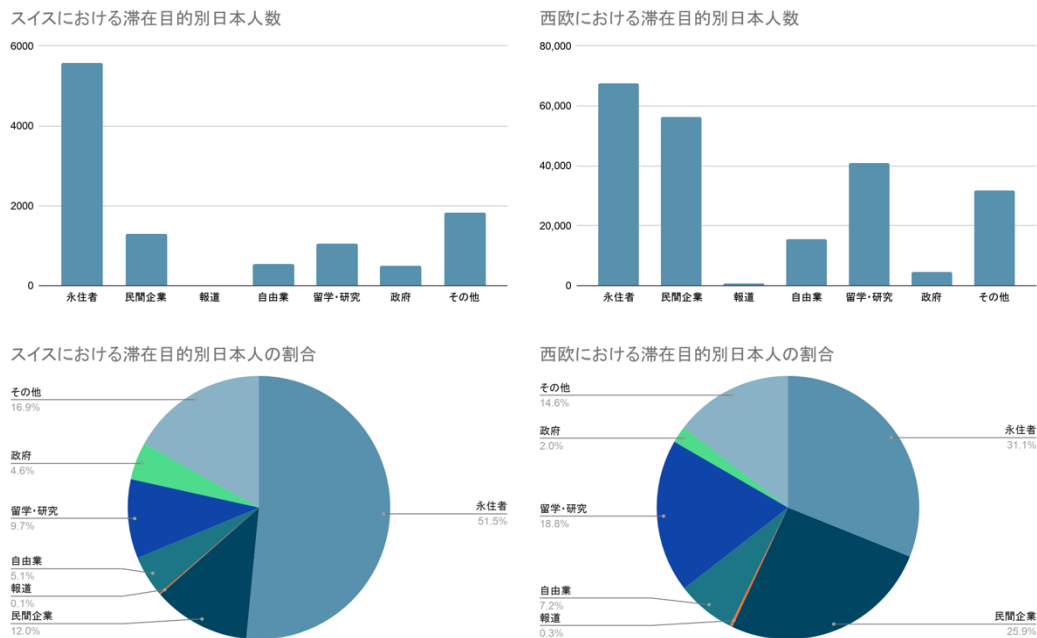


図3 スイスと西欧における滞在目的別日本人数と割合  
出典：外務省『海外在留邦人調査統計』より筆者作成

次にスイスの各カントン毎の日本人の数を見ていく。2019年12月31日現在、各カントンに暮らす日本人の数を一覧にしたものが表1及び表2である。

この表によれば、スイスに暮らす日本人は男性が1593人であるのに対し、女性が3768人と女性の方が多く、3種類の滞在許可証の中で、短期滞在許可（L）の人は初期滞在許可証（B）や定住許可証（C）の人に比べて数が大幅に少ないことが読み取れる。ただしこのデータはスイス移民局（英語名：State Secretariat for Migration SEM）が発表しているデータであるため、外務省「海外在留邦人数調査統計」と人数が異なっている。

また、日本人が多く集中しているカントンとしては、チューリッ州（1365人）、ヴォー州（905人）、ジュネーヴ州（874人）が挙げられる。これらの地域に日本人が集住している理由としては、チューリッ州には日系企業の支社や現地邦人がスイス国内の他の地域と比べて多く存在していること、ジュネーヴ州には国連関連の補助機関や研究機関が集中していること、ヴォー州は人口3位のカントンと元々人口が多い<sup>5</sup>ことに加え、スイス公文学園高等部という全寮制の日本の学校がある<sup>6</sup>ことが理由として考えられる。

---

<sup>5</sup>[https://www.bfs.admin.ch/bfsstatic/dam/assets/3902101/master#:~:text=Zurich%20\(1.5%20million\)%20and%20Bern,recorded%20population%20growth%20in%202016](https://www.bfs.admin.ch/bfsstatic/dam/assets/3902101/master#:~:text=Zurich%20(1.5%20million)%20and%20Bern,recorded%20population%20growth%20in%202016)（2021年1月10日閲覧）

<sup>6</sup><https://www.klas-ac.jp>（2020年12月30日閲覧）

表 1 カントンごとの日本人数（1）

（単位：人）

カントン名	定住者	短期滞在許可（L）			初期滞在許可証（B）			定住許可証（C）		
	全体	全体	女性	男性	全体	女性	男性	全体	女性	男性
スイス全体	5,361	112	53	59	2,598	1,625	973	2,651	2,090	561
アールガウ州	207	2	1	1	63	45	18	142	116	26
アッペンツェル・インナーローデン準州	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0
アッペンツェル・アウサーローデン準州	10	0	0	0	1	1	0	9	7	2
ベルン州	391	14	9	5	147	96	51	230	187	43
バーゼル＝ラント準州	160	8	4	4	57	34	23	95	75	20
バーゼル＝シュタット準州	294	7	3	4	183	118	65	104	71	33
フリブール州	97	0	0	0	40	30	10	57	49	8
ジュネーヴ州	874	7	3	4	528	299	229	339	229	110
グラールス州	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0
グラウビュンデン州	36	0	0	0	13	12	1	23	22	1
ジュラ州	18	0	0	0	10	9	1	8	7	1
ルツェルン州	193	0	0	0	74	45	29	119	99	20

出典：Information et communication SEM 『Statistique 2019 relatives aux étrangers』より筆者作成



表 2 カントンごとの日本人数 (2)

(単位：人)

カントン名	定住者	短期滞在許可 (L)			初期滞在許可証 (B)			定住許可証 (C)		
	全体	全体	女性	男性	全体	女性	男性	全体	女性	男性
ヌーシャテル州	95	7	4	3	36	25	11	52	39	13
ニトヴァルデン準州	8	0	0	0	4	4	0	4	4	0
オプヴァルデン準州	3	0	0	0	1	1	0	2	1	1
ザンクト・ガレン州	135	3	1	2	49	41	8	83	60	23
シャフハウゼン州	21	0	0	0	6	4	2	15	13	2
ゾロトゥルン州	80	5	3	2	28	23	5	47	43	4
シュヴィーツ州	65	0	0	0	21	18	3	44	39	5
トゥールガウ州	56	0	0	0	13	12	1	43	37	6
ティチーノ州	145	0	0	0	67	47	20	78	64	14
ウーリ州	11	0	0	0	3	1	2	8	6	2
ヴォー州	905	11	3	8	587	332	255	307	232	75
ヴァレー州	85	1	0	1	42	30	12	42	28	14
ツーク州	105	1	1	0	45	28	17	59	54	5
チューリヒ州	1,365	46	21	25	579	370	209	740	607	133

出典：Information et communication SEM 『Statistique 2019 relatives aux étrangers』 より筆者作成

## 第4章 インタビュー調査について

### 4.1 インタビュー調査の概要

本章では、筆者が2019年3月より2019年6月までの4ヶ月間にスイスのベルン州にて実施した日本人移民家庭19組を対象としたインタビュー調査について述べていく。本調査では、スイスにおいて暮らしている日本人は、普段どのようにして周囲の人間と交流しているのか、スイスにて生活を送るにあたりどういった点で苦勞をしているのかを明らかにすることを目指した。また、日本において他人や地域と交流が生まれるきっかけとして、子供の通う学校での活動を通じて知り合うことや町内会に参加することで周囲とコミュニケーションが生まれることがあるため、そのような点はスイスでも見られるのかについても検証することを目的とした。

調査は柔軟に行われ、累計で13回のインタビューを行うことができ、1度に1名の方からお話を伺うこともあれば、1度に6名の方からお話を伺うこともあった。インタビューの対象者は、ビザや会社の辞令などによって帰国が左右される人、単身赴任でスイスに来ている人、短期滞在が目的の人などを除いた、長期滞在を前提としてスイスに来ている人や結果的に長期にわたってスイスに暮らしている日本人とした。

インタビューの対象者を探すのに際し今回は(1)在スイス日本大使館にて行われている「日本語を話す会」(ベルンの在スイス日本国大使館広報文化センターが主催するイベント。2週間に1回ほどのペースで開催されており、日本語を勉強している、話したい外国人が集まって日本人との交流をするイベントである。)に赴き、調査に協力して下さる日本人を探す方法、(2)親戚の友人がベルン州にて生活をしており、子供をベルン市にある日本語教室に通わせていたことから、彼女から輪を広げてもらう方法の2種類を採用した。

今回のインタビュー調査での質問事項としては、家族構成とスイスに来た経緯・背景、どのように人付き合いを行っているのか(どのような経緯で知り合い、どのような会話や日常的な交流をしているのか)、外国人としてスイスにて暮らす中でどういった点で日本にいる時よりも苦勞をしているのか、日々の生活の中で寂しいと思う時はどんなときか、それらをどのようにして乗り越えているのか、といった点を意識しながらお話を伺った。またインタビューの中で、まず本論文の掲載許可を取ること、オープン・エンド・クエスチョンの形式で質問をすること、相手の方の話を遮ることはせず相手のペースで話しやすい環境を作ることについては特に留意した。

今回のインタビュー調査に応じてくださった方を簡単に表にまとめる。なお、本章で使われている数字(年齢、在住歴等)はインタビュー当時のものを使用した。

インタビューの詳細に入る前に、インタビュー内に出てくる用語やスイスの社会システムについて解説する。



### (1) スイスの言語について

スイスでは公用語として、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の4つの言語が定められている。インタビュー調査を行ったベルン州はドイツ語圏とフランス語圏が州内に存在しているが、本調査はドイツ語圏の地域で行われた。

スイスのドイツ語は日本において一般的にドイツ語を指している高地ドイツ語(Hochdeutsch)ではなく、スイスドイツ語(Schweizerdeutsch)が現地語として使われている(公用語は高地ドイツ語)。また、このスイスドイツ語の中でも、各地域によって方言があり微妙に異なっており、ベルンではベルンドイツ語(Berndeutsch)が話されている。ベルンドイツ語を含むスイスドイツ語は話し言葉であり、文法などが存在しない。大喜(2014)によれば、話しことばとしてのスイスドイツ語と書きことばとしての高地ドイツ語は大きく異なっており、ドイツ人にとってはこのスイスドイツ語は理解できない言語となっている。

### (2) スイスの教育制度について

スイスの教育制度はドイツと同様、年齢がそこまで高くない時点で将来を決める必要がある。中学校までは義務教育であるが、中学校卒業後は、中学校のときの成績が高い方から順番にギムナジウムと呼ばれる高等学校、専門高等学校、職業訓練学校の3つに進路が分かれる。大学への進学を考える場合には、ギムナジウムに進み、マトゥーラを取得する必要がある。ただし、スイスの大学進学率は3割程度と日本ほど高くない。スイスでは大学に進学できなかったからといって所謂、落ちこぼれとみなされるわけではない。スイスの場合は他のヨーロッパの国でもそうであるように、高い専門的技術を持つものは社会の中で高い評価を得ることが可能である。ただし、渋谷(2010)が指摘するように、上記のようなスイスの教育制度においては、家庭背景の影響が相対的に大きくなり、移民家庭は不利な立場に置かれやすいのも事実である。

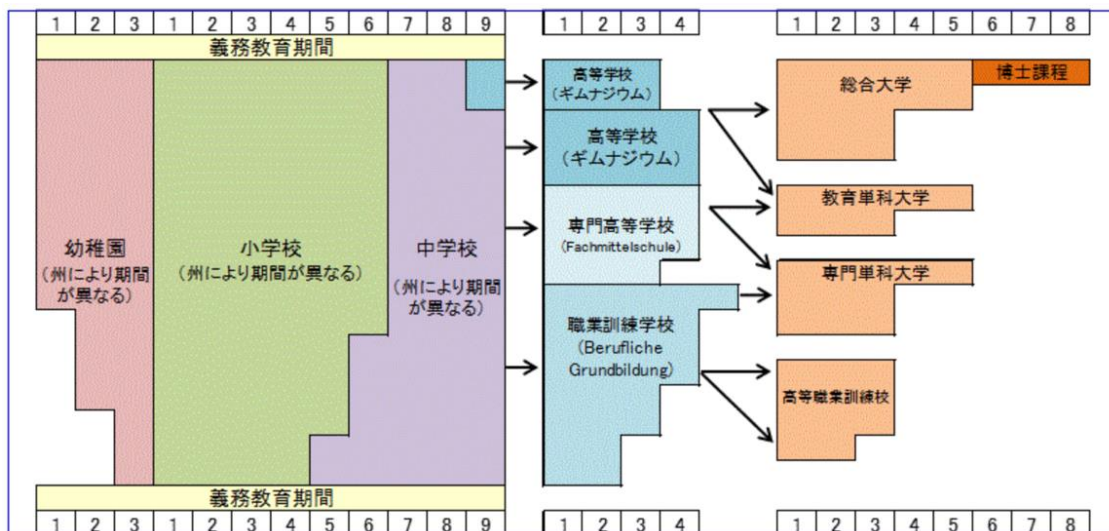


図 4 スイスの教育制度について

出典：外務省『諸外国・地域の学校情報』<sup>7</sup>より筆者引用

### (3) 日本語教室

今回のインタビュー調査において多くの方を見つけることができた施設である。本教室のHPによれば、「日本人・日系人の子供のために、1995年に設立された非営利団体」<sup>8</sup>である。ベルン州教育省の HSK 授業校 (Unterricht in heimatlicher Sprache und Kultur の略で、移民の人たちの母国語や母文化を継承することを推進する取り組み)<sup>9</sup>に認定されており、校舎や設備についてはベルン州から無償貸与の支援を受けている。学校運営の資金は後述の日本人会のバザーの売り上げや授業料、寄付によって賄われている。教科書は日本の小学校で使われている国語の教科書などを使用し、授業は週に1回90分行われている。子供が授業を受けている間、親たちは学校の校庭のベンチや近くのカフェでお茶会をしたり、一度家に帰るなどしている。同様の日本語教室はチューリッヒやバーゼル、ヌーシャテルなどのスイスの他の地域にもある。

<sup>7</sup>[https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world\\_school/05europe/infoC52100.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/05europe/infoC52100.html)

(2021年1月20日閲覧)

<sup>8</sup><http://bernihongo.blog137.fc2.com/blog-category-12.html> (2021年1月20日閲覧)

<sup>9</sup>[https://www.erz.be.ch/erz/de/index/kindergarten\\_volksschule/kindergarten\\_volksschule/interkulturelle\\_bildung/hsk-unterricht.html](https://www.erz.be.ch/erz/de/index/kindergarten_volksschule/kindergarten_volksschule/interkulturelle_bildung/hsk-unterricht.html) (2021年1月20日閲覧)

#### (4) ベルンの日本人会

Facebook の情報<sup>10</sup>によると、1987 年に創立された会で、ベルン周辺の在スイス日本人とその家族ら約 120 家族が会員となっている。新年会とバザーが毎年恒例のイベントとなっている。このバザーには、日本人会の会員だけでなく、会員以外の日本人や親日家、地元のスイス人も足を運んでいる。また、年に 6 回前後、「ベルン日本人会会報」という会員情報紙を発行している。

---

<sup>10</sup> [https://www.facebook.com/pg/BernNipponjinkai/about/?ref=page\\_internal](https://www.facebook.com/pg/BernNipponjinkai/about/?ref=page_internal) (2021 年 1 月 20 日閲覧)

表 3 インタビュー対象者の概略（1）

氏名	性別	家族構成	職業	居住地	移住理由	スイス在住歴
Aさん	女性	夫（スイス人） 娘 16 歳 息子 11 歳	主婦・アルバイトあり	ベルン	結婚	20 年
Bさん	女性	夫（スイス人） 息子 11 歳	主婦	ベルン	結婚	15 年
Cさん	女性	夫（フランス人） 息子 11 歳、8 歳、4 歳	主婦	ベルン	結婚	15 年
Dさん	女性	夫（スイス人） 子供 12 歳	不明	不明	結婚	14 年
Eさん	女性	夫（日本人） 息子 12 歳 娘 10 歳	不明	ベルン	夫の仕事	15 年
Fさん	女性	夫（スイス人） 子供 12 歳 10 歳	不明	不明	結婚	14 年
Gさん	女性	夫（スイス人） 娘 15 歳、11 歳	不明	不明	結婚	20 年
Hさん	女性	夫（スイス人） 息子 18 歳、10 歳 娘 14 歳	飛行機の客室乗務員	不明	結婚	19 年
Iさん	女性	夫（ドイツ人） 娘 14 歳、12 歳、8 歳	不明	不明	夫の仕事	11 年
Jさん	女性	夫（オランダ人）	主婦	シュピーツ	仕事→結婚	15 年

		娘 12 歲 息子 7 歲				
--	--	---------------	--	--	--	--

表 4 インタビュー対象者の概略（2）

氏名	性別	家族構成	職業	居住地	移住理由	スイス在住歴
Kさん	女性	夫（スイス人） 娘 21 歳 息子 17 歳	美容師	ベルン	結婚	21 年
Lさん	女性	夫（スイス人） 娘 12 歳、10 歳	主婦	ベルン郊外	旅行→結婚	不明
Mさん	女性	夫（日本人） 娘 10 歳 息子 6 歳	主婦	ベルン	夫の仕事	11 年
Nさん	男性	妻（スイス人） 息子 38 歳 娘 34 歳	不明	ベルン	仕事	45 年
Oさん	女性	夫（日本人）	主婦	トゥーン	夫の仕事	4 年
Pさん	女性	夫（スイス人） 息子 12 歳、10 歳	不明	トゥーン	結婚	13 年
Qさん	女性	夫（スイス人、12 年前に他界） 娘 42 歳 息子 36 歳	主婦	ベルン	仕事→結婚	37 年
Rさん	男性	妻（スイス人） 娘 10 歳	主夫	不明	避災	9 年
Sさん	女性	夫（スイス人） 息子 7 歳 娘 4 歳	主婦	ベルン	夫の仕事	1 年未満

## 4.2 インタビュー調査の詳細

本節においてはインタビュー調査の詳細な内容を記していく。

まず、今回のインタビュー調査にご協力いただいた人の基本情報は表3、4の通りである。インタビューに応じてくださった方のほとんどが女性で、かつ専業主婦をしている方がほとんどであった。また夫婦ともに日本人の家庭よりも夫がスイス人の家庭の方に多くインタビューをすることができた。

以下、各インタビューの詳細を述べていく。

### (1) Aさん、Bさん、Cさん

今回のインタビュー調査で初めてお話を伺った3名である。全員子供がおり、スイスに来た理由も全員結婚である。AさんとBさんの夫はスイス人、Cさんの夫はフランス人である。住んでいる地域は全員ベルン市内でありメインステーションからトラムでアクセス可能である。

まずは、人との付き合い方についてお話を伺った。人との付き合いは移り住んでからの時期によって変わるとともに、知り合いのでき方も人それぞれであった。具体的に示すと、Aさんは、当初、主人の家族や知り合いなどから交友関係が始まった。一方で、Bさんはスイスに来てすぐに日本人の方を紹介してもらい、日本人との交流が盛んだったそうだ。

次に、皆さんドイツ語を話せるとのことだったので、なぜ、ドイツ語を学んだのか伺った。スイス人は地域によって変わるものの、日本人と同じように、心の扉を開いてくれるまでに時間がかかることが多いと3人とも感じていた。その状況下において、ドイツ語を話すことによって、その扉を開いてくれるまでの時間が短くなると同時に、自らドイツ語を勉強するなど、周囲に溶け込もうとする努力を示すことによって、周囲からの印象がとても良くなる感じていた。特にAさんはスイスドイツ語も話せるレベルになり、現在はベルンにあるお茶屋さんで働くことができている。

### (2) Bさん

第1回のインタビューでお話を聞いたBさんに改めて個別で時間を設定してもらい、お話を伺った。

本インタビューでは、主に言語や仕事、子育てなど生活をしてきた中で大変なことを伺った。言葉に関しては第1回のインタビューにて判明したように、高地ドイツ語を話せるかの壁、さらにベルンドイツ語を話せるかの壁と2つの壁があることを伺った。語学力に関しては、もともと英語は堪能な方であり、当初は英語で意思疎通を図ることができていた。その後、Preparationコースに1年間通う中でドイツ語を勉強した。仕事については、スイスに来た当初はベルン大学の研究機関にて働く予定であったが、子供ができたため、SRF（ス

イスの報道機関)の記者的なものを経て現在は不定期で翻訳やコーディネータをしている。フランス語ができないため、「仕事がなかなか見つからない」と言っていた。

子育てについては、日本よりもむしろ良かったと言っていた。夫と2人体制での出産であったが、言語的な問題はなく出産を終えることができたそうである。ただ、幼児向け日本語教室で知り合った日本人のママ友は子育てをする中でかなり助けになる存在であったと言っていた。

差別を経験したことはあり、スーパーで知らない人に八つ当たりをされた。また、ドイツ語がわからないことであからさまに態度が変わることはしばしば経験していた。一方で、孤立していると感じたことはほとんどなかった。

子供がどのように育っているのかも伺うことができた。11歳の息子が一人いるが、彼はメンタリティはスイス人と日本人の両方を持ち合わせているようだ。Bさんが子供を日本語教室に通わせているのは、子供とのコミュニケーションを日本語で行いたいという願いからであった。

### (3) Dさん、Eさん、Fさん、Gさん、Hさん、Iさん

マイノリティと感じる場面があまりないと感じている人が多い。これは、ベルンには多くの移民や難民の外国人がいることが原因だと感じていた。中国語で話しかけられる場面もあるが、それはしょうがないと思いつつも、からかわれていると感じる場面はあるようだ。

仲良くなる人のほとんどは子供の学校を通じて知り合うことが多い。そういった知り合いの方が親切にしてくれる割合も高いようだ。これは子供を通じて知り合う人は、子供を通じて日本に興味を持ってくれる人が多いことが理由だと感じていた。近所の人との関係性について伺うと、洗濯機などを共同で使用する中で、同じ集合住宅に住む外国人が自身の家庭のみのため、周囲に何か言われることを避けるために、綺麗に住宅内を使うことを心がけているといった声が聞かれた。また、子供がいない日本人の方が孤立しているのではないか？田舎や高級住宅が多いエリアも差別等が多いように感じているといった声も上がっていた。

Hさんが以前、2年ほど家族全員で日本で暮らしたことがあった(きっかけは息子が母親の日本語を真似しはじめて女性口調になったこと)話になると、これを聞いていた多くの人たちが自分もやってみたかったと感じていた。理由は、自身が外国人として暮らす中での苦勞を夫に対しても知ってもらいたいためであった。ただし、多くの人が、日本滞在中の夫の仕事が見つからないだろうと感じていた。

マイノリティを感じる場面について伺った。子供の送り迎えの時に親同士で話している時に、大人数になると会話がスイスドイツ語行われてしまい、そのような場面でマイノリティなんだと感じているようだ。その一方で、移民の人たちに向けた集まりに参加している時などは高地ドイツ語で会話が行われるため、安心できるようだ。



義理の両親との関係性がうまくいっている人は比較的スイスでの生活をポジティブに捉えている人が多いように感じていた。

外国人として暮らす中での苦勞についてお話を伺った。公的な手紙については理解が難しいため、手紙を読む際や出す際には日本語教室で知り合った人やスイス人の夫、近所に暮らす人に助けてもらっているようだ。スイスに暮らす人たちはお願いをしてもあまり嫌がられないと感じている。また、日本食が食べられないことは大変だと言っていた。例えば、インフルエンザにかかった際にチーズフォンデュを出されたり、病院でコーラとチーズを出された時は帰りたいと思ったようだ。また、老後は日本に帰りたいと考えている人が多い。これは自分たちが歳をとってボケていった際にドイツ語を話せなくなると困るためだと言っていた。他には、スイス人の夫を持つ人たちは夫の実家に帰った時は、スイスドイツ語を話せないことで孤立を感じる場面もあると言っていた。ただし、今回のインタビュー調査に応じてくださった方は自分たちのことをポジティブだと感じていたため、あまり苦勞はしていないと言っていたが、周囲にはネガティブな人たちもおり、そういった人たちは苦勞しているのではないかと感じていた。

#### (4) Jさん

家族構成は、オランダ人の夫、12歳の娘、7歳の息子の4人でシュピーツというベルンから40キロほど離れた街で暮らしている。海外経験としては、高校時代から留学やワーキングホリデーなどでいくつかの国に滞在したことがある。スイスの滞在歴は2度あり、2回目の滞在の際に現在の夫と出会い、2005年に結婚。夫はオランダ在住期間よりもスイスの在住期間のほうが長く、ドイツ語は流暢に話すことができる。

まず、人付き合いについてお話を伺ったところ、基本的には日本語教室の母親たちと関係を持っていると答えた。以前、スイスに来てから人間関係で「へこんだ」ことがあったため、人付き合いを減らしていた時期もあったが、最近は子供の習い事を通じて知り合った人とお茶をしたりはするようである。また、近所付き合いとしては、隣に住む人に庭の手入れやスイスの生活システム（ゴミの分別方法など）、子供の勉強などでお世話になっている。ただし、夫婦ともに外国人としてスイスで暮らす中で、「いないこと」をして怒られることや「外国人だからこの国のことを知らない」と思われることを避けるためにも「枠をはみ出ないように気をつけて」おり、多少の生きづらさを感じている。

そういった中で差別を感じることもあるかお話を伺うと、「差別はどこで出会うか分からないからこそ怖い」と言っていた。また、本人は差別だと感じていなくても、周りから差別であると言われたことによって差別に気がつくことがあると言っていた。そして、差別をする人はスイス人よりもスイスに移民として来ている人の方が多いと感じていた。差別を感じた事例として、以前住んでいた家（ベルンから少し田舎に行ったところ）の隣の人が6年間挨拶を全くしてくれないことがあった。その人は農家の人であったものの、現在の隣の人は農家であっても挨拶をしてくれるため、差別をするかどうかは個々人の問題だと感じて

いる。また、孤立していると感じる場面も多々あると言っていた。例えば、子供の学校の集まりに出席した際、周りから「あんた誰や」といった目で見られることや、先生が何をいつているのか分からない時に周りで自分と同じような感じになっている人がいないといったことを挙げていた。友人関係に話を戻すと、何でも話せるような友人としては日本人を入れて6人ぐらいいる。もちろん子供を通じて知り合った人もたくさんいるが、何でも悩みを聞いてもらえるような人は、もっと若い頃に会った人の方が多い。ただしそういった人たちと常にべったりとくっついているわけではなく1年に1回程度連絡を取るような間柄である。ご近所付き合いをしている人はほとんど心を許せる関係にはなれないようだ。一緒にお茶をしたりする事はあるが、子供を預けなければならない時は日本語教室の母親たちに預けたりするようだ。

日本人会についてはあまり深く関わらないようにしている。これは以前チューリヒに住んでいた時、日本人コミュニティーの中で「ギスギスしてしまった」ことがきっかけとなっている。また、この話の中でチューリヒとベルンの空気感の違いについてお話を伺えた。チューリヒは、スイスに暮らしている日本人駐在でスイスにやってきている人たちの間で、グループが分かれていたそうである。一方、ベルンではあまりそういった話を聞かないそうである。ご近所付き合いも含めて100%心を開くことがあまりなく、「しんどい」と言っていた。日本に帰りたいとは思っているが、これまでスイスで生まれ育った子供が日本に帰って「うまくやっっていける」とは思わないため、勉強のことなども考え、すぐには帰れないと思っている。子供が成長したら日本に帰っても良いと思っているそうである。

次に、夫婦ともにスイス人ではないことからの困難についてお話を伺った。まず1点目として、子供に勉強を教えることができないと言っていた。夫婦ともにドイツ語がネイティブではないため、プレゼンテーションの準備や文章を書くことについては隣に住んでいるおばさんに勉強を見てもらっているそうである。2点目として、スイスの文化についての理解がないことを挙げていた。スイスでは小学校の遠足の際にバーベキューをするため、ソーセージをもっていくことが一般的である。娘のはじめての遠足の際に、プリントにそのことが明記されていたものの、その情報を見落としてしまい娘がソーセージを忘れてしまった。Jさんはその際には、「かなりへこんだ」と言っており、これでは今後も娘に迷惑をかけてしまうかもしれないと思っていた。そのようなことを踏まえて、ドイツ語を勉強しようと思ったが、息子が幼かったために勉強する時間がなかったことや、ドイツ語のクラスが都心に出てこないといふことが原因で、勉強する機会が得られず、現在でもドイツ語は話せないようだ。

最後に子供の様子についてお話を伺った。娘は日本語とスイスドイツ語、高地ドイツ語、英語を勉強している。日本語を勉強させているのは、日本に帰った時に親戚と話せるようにするためである。現在の日本語レベルでは目的を達成しているため、もうこれ以上勉強しなくても良いと思っているが、娘にとって、幼少期から似た境遇で育ってきている他の子供たちと会える日本語教室が心の支えとなっているため、今でも日本語教室に通っている。また

ドイツ語を話している時よりも、日本語を話しているときの娘の方が明るいと言っていた。これは、娘がドイツ語で何かからかわれたことがあったのではないかと、Jさんは推測している。息子については、娘の友人が家にやってくる環境下で育ったため、人に慣れてしていると話していた。娘の時の「失敗を踏まえて」本や NETFLIX などを通じてドイツ語の勉強をさせているとのことだった。来年からは日本語教室も始まるが、毎週シュピーツからベルンに連れてくるのは「しんどいなあ」と笑いながら話していた。

#### (5) Eさんとその夫

家族構成は、日本人の夫、13歳の息子、9歳の娘の4人暮らしでベルンに住んでおり、夫の仕事（和食レストランの料理人）でスイスにやってきた。

まず、人付き合いについてお話を伺った。基本的に人のつながりが子供を通じたものが多い。特に日本人は子供の日本語教室を通じて知り合うことが多いそうだ。また、近所の知り合いも子供の学校通じてできることが多いそうだ。子供の習い事を通じた知り合いがいるのか聞いたところ、「半年くらいで習い事を辞めてしまったため、出来なかった」と言っていた。子供を通さない親しい知り合いのスイス人はいないそうだ。テーマによっては話せる人は数人いる。子供が幼稚園のときには、送り迎えが必要なことから、どの人が誰の親か認識することができたそうだ。また、幼稚園から中学校までクラスが変わらないためその認識は続けることができるそうだ。このことについてEさんは「親子ともにクラス内でうまくいかない大変なことになる」と言っていた。

次に子育ての中で大変だったことについてお話を伺った。前述のJさんの娘の遠足のような出来事に関して伺うと、学校からの手紙等はしっかりと読んでいたため基本的な準備は大丈夫だったそうだ。強いて言えば、娘の初めての遠足の時に、「サンドイッチかおにぎりのどちらをもっていく?」と聞いたところおにぎりを要望したためおにぎり持たせたところ、周りから注目の的となったためか、次から娘はサンドイッチを所望するようになったという出来事を挙げていた。子供の勉強については、最近ベルンにおいて教育制度が変わり、宿題が出なくなったため、最近あまり勉強の面倒を見ていないとしつつも、それまでは面倒を見ることができていたと言っていた。学校内での子供の様子は「これまで反省文をいろいろ書かされてきた」と言っていた。同級生からいじめられたりしたわけではないが、女の子にからかわれて反撃したりしたことが原因だそうだ。そう言った出来事については、学校は「家庭内で解決してください」という立場をとることが多いため、息子にも注意をする一方で、学校の担任に対してもクラス内でのいじめや喧嘩については注意するように伝えているそうだ。反省文については、息子よりも年上の子供を持つ家庭の日本人親から、子供が学校で問題を起こすと手紙をもらうことがあるかもしれないと言われていたため、手紙をもらった際にはパニックになるよりは、「やっぱり」と感じたそうだ。子供に対するドイツ語教育については、自然とできるようになったとしつつ、子供の語学力を伸ばすためには、子供を積極的に外に遊ばせに行ったり、スイス人の友人に声をかけて約束を取り付けて遊

ばせたりすることで、積極的に子供がドイツ語を聞き、話す環境を用意することは心がけたそう。

そして、夫婦共に日本人であることの大変さについて伺った。まず挙げていたのが、事務手続きの大変さであった。役所に行って話を聞いたり、手続きを行う際には、予め知識をつけた上で臨むこと、ドイツ語で簡潔に要件を伝えられるように準備をすること、事前に想定問答集をドイツ語で考えることなどを行っているそう。Eさんはこのインタビューの直前に給料が振り込まれる口座について銀行に質問をしに行っており、インタビューの途中で、その内容について夫に伝える場面があった。その話が終わった後に夫に、自分一人の力でそのようなやりとりを行う自身があるか伺ったところ、「全く自信がないため、妻がなくなってしまった場合は周りに助けしてもらわないといけないね」と言っていた。ドイツ語の能力としては、妻は話せる一方で、夫の方は話すことができない。これについて夫は、ドイツ語がわからないと様々な場面で困るのがわかっている一方で、当初はスイスにここまで長く滞在するつもりではなかったためドイツ語を勉強する時間をもったいないと考えていたこと、仕事で忙しく勉強をする時間が取れないことを言っていた。そのような状況下で、子供の学校のことや日常生活に関しては妻である Eさんが主体で取り組んでいる。子供が大きくなり、ドイツ語がわかるようになったことで大分助けになってきているが、子供に完全に任せきりにならないようには気をつけている。他の日本人家庭の中には、銀行や保険などの「難しい話」についてはスイス人のパートナーに任せたり、ドイツ語が堪能な子供に任せる家が多いため、日本人同士ではわからないことも多いそう。生活をする上での習慣への適用の仕方について伺うと、ゴミ捨てのルール等について夫婦で日本食レストランで働いていたときに職場の日本人から話を聞いていたそう。英語やドイツ語だと「100%の理解にはなかなかならない」ため、職場に日本人がいるのはとても役に立ったと言っていた。

スイスに暮らす中での差別の経験について伺うと、Eさんは自分自身のことを「能天気」だとした上で、差別が気になったことはあまりないと言っていた。ただし、理不尽なことを言われた際にはしっかりと言い返しているそうである。一方の夫は家族といたときに、Eさんと娘が何も言われなかったにもかかわらず、本人だけに対して何かを言われたことがある（ドイツ語がわからないため、何を言われたのかはわからないが、おそらく侮蔑的なことだと想像していた）そう。

最後に日本に帰りたと思うか聞いた。まずスイスで暮らす中で感じている寂しさについて、Eさんは母が近所に暮らしていたら子供を預けて友達とご飯に行ったり出来たと感じたことがあったそうである。周囲には日本人夫婦がほとんどおらず、周囲の日本人は近所にくらす義理の親に子供を預けて集まっていたそう。一方の夫についてはドイツ語が出来ないため、知り合いは仕事場のみになってくることに加え、子供を通じた知り合いは相手も仕事があるから会う機会がないため、寂しさは常々感じているそう。ただ、スイスの生活は日本に比べると給料面を含め環境がよく、1年に1回は日本に帰る機会とお金があることから暫くはスイスで暮らすことを考えているそう。また、夫は、料理人としての手腕がス

イスに来てから日本にいたときに比べると落ちてきているため、帰っても今の生活水準は維持できないと感じている。一方で、他の日本人の中には、日本に帰りたいと考えている人の話はよく聞くそうだ。これについてEさんは、「個人の差なのではないか?」と感じているそうだ。もし自分だけでなく、子供がいじめられるようなことがあれば日本に帰ることを考えたかもしれないが、これまでそのようなことは起こっていないため、暫くはスイスで暮らし、老後は日本で暮らして日本のお墓に入りたいと言っていた。

#### (6) Kさん

家族構成は、スイス人の夫、21歳の娘、17歳の息子の4人暮らしである。ベルンに住んでおり、結婚を機にスイスにやってきた。Kさんはスイスで美容師をやっている。

まず、人付き合いについてお話を伺った。プライベートで仲良くしているのは日本人が主である。出会うきっかけとしては子供の日本語教室を通じて知り合う場合と、仕事を通じて知り合う場合、他の日本人から紹介される場合があるそうだ。日本人だけでなく、スイス人やスイス人ではない外国人との付き合いもあるそうだ。特にスイス人ではない外国人とはスイス人の悪口を言い合ったりしている。子供を通じた知り合い(学校のクラスメートの母親など)は子供が小さい頃は付き合いがあった。Kさんの場合は、夫が土日も仕事のことが多かったため、学校が休みのたびに子供を連れて友人宅を訪問していたそうだ。これについてKさんは育児の不満の解消や、夫がいない中で生じていた暇の解消などになり、「かなり助かった」としていた。しかし、子供が成長するにつれて、疎遠になってしまうそうだ。近所付き合いについては、暖かい季節になると自分たちも含めて外に出てくるため庭先で話をしたり、旅行に行く際は鍵を預けて郵便物を預かってもらうことがある。ただし、このような関係についてKさんは深い付き合いだとは思っていない。Kさんの暮らす集合住宅は共有部分がほとんどないため、近所付き合いがほとんど生まれていないのではないかと本人は感じている。

次に言語レベルについてお話を伺った。Kさんのドイツ語レベルはCEFRのB2である。スイスドイツ語についてはこれまで話すことができなかったが、最近仕事を通じてわかるようになってきたそうである。子供が幼いころに同級生のスイス人の親と話すときは高地ドイツ語でコミュニケーションをとっていたそうだ。集合住宅の住民同士で集まるときも周りが高地ドイツ語に合わせてくれるため、「引け目を感じることはあるものの、非常にありがたい」と感じている。

次にスイスで暮らす中で大変なことを伺った。差別についてはほとんど感じたことはないそうだ。一方で、言語面から住民集会や税金などの事務的な手続きは面倒であり、夫がやってくれるならやってほしいと感じているそうだ。また、話の内容がわからなくても周囲が笑っているためそれに合わせて笑ったりすることがあり、そのような場面では「自分のことが嫌になる」そうだ。ゴミ捨てなどの社会のルールについては、スイスに来た当初は義理の両親と一緒に暮らしており、暮らす中でルールを吸収していったそうだ。夫の実家の家族と

の関係については、基本的には高地ドイツ語を話してくれることが多いが、義理の兄は絶対に高地ドイツ語を話さないため、皆で集まるときは近くに座らないようにしているようだ。ただ、老後は日本に帰りたいとは思っていない。理由として、「日本に帰っても逆に違和感を感じる」と考えていること、スイスの生活の質が高いこと、スイスにいる日本人の友人の方が似た経験をしたことから一緒にいたいと考えていることなどを挙げていた。私がこれまで、「このままスイスに居続けたい」と思っている人に会ったことがないことを伝えると、「世代の差なのではないか」と言っていた。Kさんほぼ同じ期間スイスに滞在しているKさんの知り合いの多くは日本に帰りたいとは思っていないようだ。

最後に子育てについて伺った。日本と文化が異なる中で学校内で失敗したこととして、遠足の時に「日本風」のお弁当を持って行かせたこと、誕生日パーティーの際に、ショートケーキを作って行ったところ、カップケーキなどの「手が汚れにくい」ものを次からは持ってくるように言われたことなどを挙げていた。これらのことについて、Kさんは「失敗しないと学べないし、失敗したらもちろんショックだが、次回で直せばいいじゃない」と言っていた。また、娘と息子の進学先についてもお話を伺った。Kさんには娘と息子が一人ずついるが、娘は成績がよく、ギムナジウムに進学できたが、息子の方は進学することができなかった。このことについて彼女はショックを受けたが、自分で色々調べたり、年上の子供を持つ日本人に話を聞くことで自分の中で消化していったようだ。また、子供の夜遊びについても同様に、日本人に話を聞きながら、文化の違いだと理解していったようだ。日本語教育については、二人とも日本語教室に通っていた。これについてKさんは「(子供が)日本人でもあるため、当然である」と述べていた。メンタリティとしてはどちらもスイス人として育てていはいけるものの、息子の方が柔道をやっていることもあってか、日本人らしいメンタリティを備えていると感じているようだ。子育て全般は日本で行うよりも楽だったのではないかと感じている。

#### (7) Lさん

家族構成は、スイス人の夫、12歳の長女、10歳の次女の4人である。ベルンとトゥーンの間に位置するヴィヒトラッハところに住んでいる。家庭内では、基本的にはドイツ語で会話が行われている。ただし、母は娘に日本語で話しかけ(娘はドイツ語で返答)、夫と娘はスイスドイツ語で会話をしている。元々知り合いであった現在の夫のもとに1ヵ月遊びにきたことがスイスに来たきっかけである。その後、3ヶ月ほど語学学校に通い、ビザが切れるタイミングで結婚した。語学学校に通っていた目的としては、学校に行くことでビザ(L)を得るため、夫との生活を考えると必要になると考えたためである。

まず人付き合いについてお話を伺った。スイスに来た当初は、ドイツ語のクラスでたまたま出会った日本人とつながったり、ミクシィで人とつながったりしていた。また、夫の実家近所に偶然にも日本人がいるなど、繋がりを持つことはできていた。そして、日本語教室に通うようになってから日本人との交流が広がったと言っていた。現在仲が良いとまではい

かない関係性の人として日本語教室のママ友、子供の学校の知り合いをあげていた。ただしこういった人たちと学業面での相談をするような関係性ではない。また、学校の保護者会等に行っても話すような人はいないそうだ。学校には、日本人が1人だけでありまたアジア人もほとんどいない。周りの親たちは代々その地に住んでいる人達が多く、母親同士が姉妹のケースや同好会の仲間同士であるケースが多いそうだ。そのような関係性ができているところに積極的に入り込もうとは思わないと言っていた。理由としてLさんは、「向こうは私にドイツ語でわざわざ話さなければいけないことを面倒だと思うだろうし、私自身もあの人たちはスイスドイツ語で会話をしているほうが楽だろうなと思っている」ことを理由としてあげていた。学校の事について気軽に聞ける親が周りにいないため、学校の先生や夫に話を聞いて対応をしているそうだ。

そういった環境の中で寂しいとは感じている。田舎で外国人の割合が低いことや、保守的な人たちが周りに多いと感じている。こういった中で、日本語教室のママ友の生活の上でも助かると言っていた。愚痴や不満を聞いてくれることもあり、似た境遇だからこそ共感できる部分があるのではないかと考えていた。

スイスで暮らす中でショックだったことについて伺うと、娘の誕生日会での出来事をあげていた。幼稚園で行われた娘の誕生日会において、先生が目釣り上げる動作をしたことがあった。Lさんが講義をしたところ、先生は取材をしてくれたが、そういったことをすること自体が信じられないと言っていた。また、娘が「日本人は馬鹿だ」と言われたりした事もあったそうだ。Lさんが娘の学校に行くと、「アジア人だ！あの子のお母さんだ！」と言われることがあるため子供がたくさんいるような時間帯に学校に行くのも少し嫌になっているそうだ。娘に対しては、そのようなからかいやいじめに対しては抗議をするように伝えてはいるが、夫は反対の立場をとっている。というのも、先生に言っても伝わらなかった場合や信じてもらえなかった場合に娘が不利な立場になると考えているからだ。

Lさんは以前ベルン近くのオスタームンディゲンに住んでいた。この土地は現在Lさんが住んでいる土地に比べて都市部であり外国人が多い。なぜLさんはこの土地から引っ越したのか聞いてみた。理由としては、外国人が多すぎるために逆に学校が荒れていたことを挙げていた。引っ越したことに後悔は無いのか伺ったところ、学校が荒れているよりは今の環境の方が良いのではないかと考えていた。

最後に日本に帰りたと思うことがあるか伺った。Lさんは日本に帰りたと思う事はあがるが帰れないと言っていた。理由としては子供が大きくなっており、日本の学校についていけないこと、日本の生活に適応できないこと、夫が働く場所がないことを挙げていた。子供が大きくなって親離れをしたら日本に帰っても良いと思っている。特にLさんの場合は、一人っ子のため親に何かあったときには帰らないといけない状況もある。スイスで暮らしていて寂しいと思うときには、iPadで「ひるおび」や「ミヤネ屋」などの日本のテレビ番組を見ることで日本語を聞いて寂しさを紛らわしている。

#### (8) Mさん

夫婦ともに日本人の方にインタビューをすることができた2件目の事例である。

家族構成は、日本食レストランで働いている日本人の夫と10歳の娘、6歳の息子である。Mさんは英語はできるがドイツ語は全く話すことができない。夫はドイツ語、英語ともに話すことができない。2008年くらいに仕事がきっかけでスイスへやってきた。元々海外生活が長かったMさんがまた海外で生活してみたいと思っていたところ、たまたまインターネットで現在の夫の職場を見つけ、Mさんが夫に勧めたことでスイスでの生活がスタートした。

まず、人付き合いについてお話を伺った。基本的に付き合いがあると言えるのは、近所に住んでいる年配の日本人の方と近隣住民だと言っていた。また、子供を通じて知り合った人と交流はあるのかと伺ったところ、英語ができる人であれば話す、そうでなければ話すことはないそうである。本人は人付き合いの仕方について「ガツガツしていなくておしが強いわけではない」と振り返っていた。具体的にどんな話をするのか伺ったところ、よくあるのは天気の話で、その他としてはその日の出来事の話や旅行先での話をするそうである。また、外国人同士で話す時の方が「共感できる部分が多い」と言っていた。

次に夫婦ともにドイツ語を話せないことで生じる不便なことについてお話を伺った。1点目として書類関係を読むことができないことを挙げていた。これについては、グーグル翻訳の利用や、市役所などに行って直接人に聞くことで対応していると言っていた。最近では、現地校に通っているため、ドイツ語ができるようになっている娘に聞くといった方法も採用しているとのことだった。2点目としては、学校の3者面談で常に通訳を呼ばないことを挙げていた。これについては、Mさん自身はできれば自分の言葉で学校の先生とコミュニケーションを取りたいと思っているが、現状としては近所に住んでいる年配の日本人の方に頼っている。このように不便さを感じることはあっても、Mさんは「英語さえできれば生活はなんとかなっている」と言っていた。その一方で、学校の催し物などについての知識が全くないため、スイス人のパートナーを持つ日本人は羨ましいと言っていた。また、ドイツ語を不自由なく使える他の日本人についても羨ましいと言っていた。そこで、なぜドイツ語を勉強しないのか質問したところ、時間を取れなかったことや勉強が続かなかったことを挙げていた。スイスに来た当初は勉強する余裕があったが、子供が生まれたことで、通いで勉強する時間が取れなくなってしまった。その後スカイプレッスンやタンデムを使って勉強に挑戦するもなかなか続かないそうである。

#### (9) Nさん

今回の調査で初めて男性に行うことができた事例である。60代で、スイス人の妻と38歳の長男、34歳の長女が家族。

これまでの海外生活としては、1973年に片道の航空券を買ってロンドンへ行く。1974年にロンドンを経てスイス・チューリッヒへ移住する。結婚するまでスイスに、本人の表現によ



れば「不法滞在」をしており、テキ屋にて働いたり、ギターを弾いて過ごしていた。当時はシェアハウスにて居候状態で住んでおり、ホームレスをしたときもあった。その後日本とスイスを行き来するが、1979年からはスイスにてほとんど生活をしている。職業としてはこれまで長く、ベルンにある日本食レストランにて働いていた。来た当初は英語はできたものの、ドイツ語がわからず苦労したそう。その一方で、公私を分けるスイスの雰囲気が非常に自分の肌感覚に合っていたと言っていた。

人付き合いについてお話を伺うと、とても仲がいい人としてはバンドのメンバー、そこまではない人はたくさんおり、ほかの日本人と一緒に仕事をしていた人、子供を通じて知り合った人などを挙げていた。「町自体が非常に狭いコミュニティのため、一人知り合うだけで一気に輪が広がっていく感じがした」とNさんは言っていた。Nさんがスイスに来た当初は「変わった日本人」が多いとNさんは感じていたが、今は「それでもなさそうな気がする」と言っていた。全く知り合いがいない中で、生活情報は失敗を繰り返しながら集めたそう。また、シェアハウスに暮らしていた時代は同居人などに助けられていた。何事もポジティブに挑戦していくことが必要だとNさんは言っていた。また、ポジティブに考えているため、差別等は全く気にしていない様子が見られた。そして自身のことを、「社会には自らなじんでいくスタイルだ」と言っていた

次に今後日本に帰りたいと思うか伺ったところ、日本に帰りたいと「全く思っていない」と言っていた。理由としては、日本に帰ったあとの人との付き合いの煩わしさを挙げていた。Nさんは一人で生きていくのを好んでおり、一人でできる趣味を持っているかが外国で暮らしていくことの秘訣だと言っていた

最後に、子供たちの日本語教育について伺った。どちらの子供も、当時は日本語教室がなかったため、日本語教室には通わせることができなかったが日本語は不自由なく話せると言っていた。日本語教室に通わせる人が多い最近の状況について、「通っている人たちは煩わしさを感じてるのではないか」と考えていた。また、子供の母国語教育について、フィリピン人の子供は母親の言語（フィリピン語）を話すことができないことを事例に挙げて「人種のグレードが関係している」のではないかと述べていた。その面では日本人はスイスの中で徐々に生活が豊かになってきているのではないかと考えている。

#### (10) Oさん、Pさん

トゥーンに暮らす日本人の方にお話を伺うことができた事例である。Oさんは夫婦ともに日本人の家庭であり、子供はいない。Pさんはスイス人の夫と2人の息子を持つ4人家族である。

まず、2人の語学力についてお話を伺った。Pさんはスイスに来てから夫とその友人らと過ごす中で会話に全く参加できなかったことからドイツ語の勉強を始めた。勉強のためにドイツに10週間ほど語学留学を行ったが、スイスに戻るとスイスドイツ語は全くわからなかったそう。一方のOさんはPさんの話を聞く中で「私は余計スイスドイツ語を勉強す

るきっかけがない」と言っていた。Oさんはスイスに来た当初はドイツ語学校に週2回程度通っていたが、レベルアップしようとするドイツ語のクラスがトゥーンでは開講されていないことが原因で勉強が滞ってしまっている。Oさんの夫は高地ドイツ語のみならずスイスドイツ語を勉強しており、授業を受けるためにベルンまで行っているそうだ。これについてOさんは仕事に関係しているのではないかと考えている。またOさんはスイスに来た当初、役所に行きスイスでの暮らし方について、相談する機会があった。その中で仕事を得るために証明書をいくつか持ってきたほうがいいと言われたが、当時の語学力では理解が十分にできなかった。すると役所は次の時に日本人を通訳として連れてきたことがあったそうだ。二人ともスイスは「言葉の壁」が厚いと感じていた。スイス人が高地ドイツ語を話さない理由として、スイス人が高地ドイツ語に対してコンプレックスを感じているのではないかと考えている。

次に人付き合いについて伺った。Pさんは日本人、スイス人関係なく交流しているそうだ。深い付き合いができている日本人については、子供の日本語教室を通じて仲良くなった人よりも、以前日本食レストランで働く中で知り合った人の方が多いそうだ。スイス人の中で仲良くなる人としては夫の友人や夫の友人の彼女、仕事上で付き合いがあった人をあげていたが、「マブダチ」の関係にまでは発展しないそうだ。これは子供の日本語教室を通じて知り合った日本人との間にも同じことが言える。日本人の知り合いの中には他の日本人から紹介を受け、話を聞いてみるとたまたま近所に住んでいたといったパターンもあった。一方のOさんも日本人外国人問わず交流しているそうだ。日本人と知り合うきっかけとしては、街中で偶然出会うことや他の日本人から紹介してもらうことを挙げ、外国人と知り合うきっかけとしては教会が主催しているイベント（編み物をする会や合唱をする会など）や語学学校などを挙げていた。語学学校時代の友人とは学校が終わっても関係が続いている。特に関係が続いている友人のほとんどは、子供がいない人や大学生くらいの年齢の子供を持つ人が大半を占めていたが、これは時間の融通が効きやすいためだと感じている。また、上記の教会が主催しているイベントについては日本人から教わって参加したことはなく自ら探し出したり語学学校の友人に誘われて参加していると言っていた。Oさんの夫は地元の人たちで構成されていた音楽バンドに参加しており、夫婦ともに積極的に地域内の活動に参加していく様子が見受けられた。近隣住民との関係について伺うと、2人とも特に近隣住民から差別を受けた経験はないそうだ。Oさんに至っては、アパートの隣人が地域のルールを教えてくれるなど様々な面で気にかけてくれたと言っていた。「一見フレンドリーではないように見えるが、話をしてみると意外といい人が多く、きちんと優しく対応してくれる」というのが2人共通のスイス人の気質に関する見解だった。

その次に、Pさんに対して子育てについて伺った。子供の教育をする中での情報収集については近所に住んでいるスイス人や日本語教室に子供を通わせている母親たちから情報を集めているそうだ。込み入った話については日本人の方が聞きやすいと言っていた。また、日本人夫婦の方がそうでない家庭に比べてかなり情報収集できていることが多く、Pさん

自身も日本人夫婦の家庭に話を聞きに行くことが多いそうだ。その一方で、日本語教室の存在が生活の中で非常に助けになっているとは感じていないそうだ。

最後に O さんに対して、夫婦ともに日本人でスイスで暮らす中での苦労についてお話を伺ったところ、言葉の壁は感じつつも、差別経験等もないため特に苦労はないと言っていた。また日本が恋しいと思うことも特にはないそうだ。ただし、住宅を探す際日本人夫婦であったためスイス人が家庭内にいる人に比べて家を探しにくかったのではないかと感じていた。また、O さん自身が働きたいと思っても語学の問題で働けないだろうと感じていた。

#### (11) Q さん

今回のインタビューで最も高齢の方にお話を伺うことができた事例である。

家族構成は 12 年前に他界した夫と 42 歳の娘、36 歳の息子の 4 人家族である。現在はベルン市内に一人暮らしをしている。1972 年にチューリッヒのホテルで仕事をするようになったことがスイスに来たきっかけ。当初は 6 ヶ月で帰国する予定だったが、同じホテルで料理人として働いていた夫と出会い結婚した。世界中をあちこち旅した後、1975 年にスイスに帰国、その後娘が生まれる。1980 年に夫の仕事の関係でアメリカにわたり、ヒューストン、ソルトレイクで過ごした後、サウジアラビアへ 1986 年にスイス・アッペンツェルにてレストランをオープンした。2007 年に夫が亡くなり、仕事を探し始め、インターラーケンにある土産屋で販売をしたりお寿司を作っていた。

まず、スイスでの他の日本人との交流についてお話を伺った。スイスに来た当初は、日本人と全く出会うことはなかった。1975 年にスイスに戻ってきた際にはザンクトガレンにて日本人 2、3 名と出会うことができた。インターネットが普及していない当時は、たまたま街中で人と出会うしか方法がなかったそうである。Q さんは「現在のベルンにはたくさん日本人がおり皆助け合っていてとても楽しそうだ」と言っていた。居住年数が長くなるにつれて日本人の知り合いが増える事はなかった。5 年前にベルンにやってきてから、特に日本人会に入りイベントにボランティアとして参加する中で、ここまで日本人がスイスにいることを初めて知った。ただし、日本人が周りにいなかったためにスイスでの暮らしがとても困難だったとは感じていないそうである。

次に、文化の違いのギャップについてお話を伺った。子育てを含めて、Q さんは「自分が外国人であることを忘れてしまうくらい、スイスのことをそのまま受け入れることができた」と言っていた。ただし、教育システム(15-16 歳で将来の進路を決めなければならない)については戸惑ってしまう部分もあったそうだ。そういった部分については、周りのスイス人から話を聞くことで解消していったそうだ。本人はそれについて、スイスドイツ語ができていたことが役に立ったのではないかと感じている。

また友人関係についてお話を伺った。最初チューリッヒにいた頃は、ドイツ語や英語で周りとのコミュニケーションをとることができたため、そこまで人間関係で苦労はしなかったそうだ。アッペンツェルに戻り夫婦でレストランを開くと、友人関係は大幅に広がった。レス

トランの客層は地元の人が主だったため、客と話をする中で仲良くなり、中には家族ぐるみで仲良くなった人もいた。この時期に Q さんのスイスドイツ語は「非常に上達」したそうである。また地元のコーラスにも所属しており、そのメンバーと仲良くしていた。この友人関係はその後引っ越しをしても続いたそうである。ベルンに引っ越してからは、日本人との付き合いが非常に多くなったそうである。近所のスイス人との交流もあり、かなり親しくしているのは3家族くらいいるようだ。これについて Q さんは、やはりスイスドイツ語ができるからこそ「壁」がなくなり付き合いが多いと感じているようだ。

最後に外国人として暮らす中での苦勞についてお話を伺った。Q さんはあまり生活の中で苦勞をしてきているとは感じていないそうである。仕事についても日本語と英語のドイツ語さえできれば、日本語を生かした仕事にも就くことができると言っていた。また、歳を取る中で孤独を感じるようになってきているが、それは日本にいても全く同じだったのではないかと言っていた。

## (12) R さん

今回のインタビューで男性にインタビューできた2つめの事例である。

家族構成はスイス人の妻と10歳になる娘の3人家族である。もともと日本で仕事をしてきた Q さんであるが、アメリカに8年間暮らしていた時に現在の妻と出会い、その後スイスでの生活を経て日本へ移住した。6年間日本で生活をしてきたが、娘が2歳になった頃に東日本大震災が発生、妻の家族からの反対もあったため日本で暮らすことを諦め、「選択の余地がなく」スイスへ移住した。現在 Q さんは働いておらず、妻が在スイス日本大使館で働いている。

まず、スイスでの人付き合いについて質問をしたところ、「スイス人の文化が肌に合わない」と言っていた。Q さんはスイス人の文化について個人主義が強いように感じており、わがままな人が多いように感じている。そのためもあってか近所の人との関わりはあるが「アジア人びいき」のスイス人を除いてスイス人の仲良しはいないと言っていた。泊まりでどこかに行ったりするような友人は基本的にスイス人ではない外国人がメインとなっているそうである。他には日本人のお母さん方や外国人のお母さん方とは仲良くしているそうである。

次に言語力についての質問をした。Q さんは英語は話せるが、ドイツ語やフランス語を話すことはできない。家庭内でも娘とは日本語で会話し、妻とは英語で会話している。ドイツ語を話さない理由としては、娘の日本語が伸びるようにしたいことや、いつかは別の国で暮らしたいと思っており、スイスを「一時的な場所」と捉えているためだと言っていた。妻の実家に行った際はフランス語がしゃべれないことから義理の両親との会話がないが内装だが、本人はこれを「言葉の問題ではない」と捉えていた。その理由としては、妻の姉妹の彼氏が実家に来た際も、彼氏が家の中で「孤立している」ように見受けられたためだと説明していた。

スイスでの差別経験について伺うと、スイスには「表面的な差別はない」と言っていた。その一方で、妻の実家でも「よそ者」であるが故に差別を受けていると感じていると言っていた。また、スイスはレディーファーストの文化があるため、スイス人でなくても女性は差別を受けにくいと感じているそうである。そういった中で社会で孤立しているように感じているか伺ったが、Qさん自身は「さみしがり屋な性格ではない」ことから孤立は感じていないが、バックグラウンドによっては孤立していると感じる人はいるだろうと言っていた。

### (13) Sさん

家族構成はスイス人の夫、7歳の息子、4歳の娘の4人家族である。スイスには2018年11月にやってきており、それ以前は日本で暮らしていた。スイス移住の理由は夫の転勤によるものであった。

まず、人付き合いについて伺った。Sさんはスイスに来た直後の頃にベルンにて役所にて生活の中で困っていることについて話し合いをする機会があり、その話し合いののちに、簡単な軽食が出るパーティーや住んでいるエリアのツアーガイドが開催されたそう。このイベントには20人程度参加しており、初めてスイスに暮らす人には助かるイベントだったのではないかとSさんは感じていた(Sさん自身は夫とともに何度かスイスに来たことがあることに加え、夫の友人ともすでに交流があった)。近所付き合いとしては同じ集合住宅に住む人と、「何か足りないものがあったら言ってくださいね」と言ってもらえる程度の関係性である。Sさんは、夏になればもう少し人が外に出るようになるため、関係が深くなっていくのではないかと考えている。日本人の知り合いについては、息子が日本語教室に通っていることからそこで知り合う人が非常に多い。Sさんにとって日本語教室の存在は、週に1度日本語を話す貴重な機会になっていることに加え、ドイツ語に関するアドバイスや、子供の学校についての情報などを得ることができ、生活の助けになっているそう。また、趣味でやっている茶道の教室がベルンにあったことから茶道をしている。教室には第1回インタビューのAさんも在籍しており、そこでの交流もSさんにとって心地よい時間となっている。日本人以外との交流としては、夫がベルン育ちのため、夫の昔からの友人や夫の親との交流はあるものの、そこまで輪は広がっていない。また、息子が学校に通い始めたのがインタビューを行った1ヶ月前だったため、子供の学校を通じて知り合った人はまだほとんどいない。ちなみにそれ以前はドイツ語を話せない子供たちのためにドイツ語の勉強のみを行うクラスに入っていた。このクラスは公立のものであり、4-5人の生徒に対して2人のドイツ語の先生がつく無料のクラスである。

次に子供の様子について伺った。どちらの子供もドイツ語を話すようになってきている。息子は上記の方法でドイツ語を勉強し、現在は地元の学校に通っている。2年生に進級できたことから学校の勉強についていけていると考えられる。Sさんの夫から見ても息子のドイツ語力は問題ないそう。娘は1月から、保育園に半日くらい通わせていた。日本にいるときから父と子供の間はドイツ語(子供は日本語で返事)であり、1年に1-2週間程度スイ

スに行っていたため、元々ドイツ語を話す環境があったことも影響しているのではないかと S さんは考えていた。

### 4.3 インタビュー調査から見えたこと

今回のインタビュー調査を通じて、日本人の移民と地域住民の関わり方について、いくつかの点で違いが見受けられた。本節では、「家族構成」「語学力」「スイスに来た時期・年齢」「居住地域」の4点について、インタビュー調査の結果を踏まえながら各家庭について比較を行う。

#### (1) 家族構成について

家族構成が地域住民との関わり方に対して与える影響を見ていく。今回のインタビュー調査に応じて下さった人は全員結婚していたが、子供の有無や結婚相手の国籍に応じて以下のように分類することができる。

表 5 家族構成によるインタビュー対象者の分類

夫婦共に日本人（子供なし）	O さん
夫婦共に日本人（子供あり）	E さん、M さん
結婚相手がスイス人以外の外国人（子供あり）	C さん、D さん、J さん
結婚相手がスイス人（子供あり）	その他

最初に子供の有無が与える影響についてみていく。

子供がいない場合、O さんがインタビュー内で言っていたように、子供がいる家庭に比べて「積極的に」関係性を構築していく必要がある。O さんやその夫の場合、友人を作っていくために地域で行われているイベントに参加したり、地元の同好会のようなものに参加している。また、今回インタビューを行った人の多くはスイスにやってきてから子供ができています。子供ができる以前の人との交流方法を聞くと、語学学校で知り合う場合や職場を通じて知り合いができる場合などがあつた。職場を通じて知り合う場合についてはインタビューを行なった人の多くは語学力の関係から日本料理店で働くことが多く、この場合において作ることができる知人は日本人であるパターンが多かった。ただし、O さんの夫や Q さんのように周囲に日本人がいない環境下で働く場合はスイス人を含む外国人との交流も生まれやすい様子が見受けられた。語学学校を通じて知り合う場合はスイス人ではない移民や難民の人たちと交流していくことが多い。ただし、上記のようなきっかけで友人ができた場合でも、相手に子供がいないか、大学生くらいの年齢の子供を持つ人でないと相手の時間の都合がつかないため、定期的に会うことが難しいとの声が聞かれた。

一方、子供がいる場合は多くの人たちが言っていたように子供の学校を通じて知り合う場合や子供の日本語教室を通じて知り合うことが多い。子供の学校を通じて知り合う場合、

相手はスイス人やスイス人以外の外国人である。Eさんがインタビュー内で言っていたように、幼稚園の送り迎えなどを通じて知り合うことが多い。基本的には子育てに関する会話などが主な交流の仕方となっているが、Eさんのように子供同士を遊ばせることによって子供の語学力向上に役立っているケースも見られた。日本語教室を通じて知り合う場合は相手が日本人であるパターンがほとんどである。こちらも子育てをする中での情報交換やスイスの生活システムの情報収集の場となっている。

子供の有無を比べた際、子供がいる人の方が友人が多いように感じた。これは子供を介することで知人ができやすいことはもちろんであるが、子育てをする中でわからないことが多数生じ、その解決のために他人を必要としていることも原因であると考えられる。ただし、Kさんがインタビュー内で言っていたように、子供の成長に合わせて関係性は徐々に薄くなっていく。また、Lさんがインタビュー内で答えていたように相手が外国人である場合に比べて相手が日本人の方が情報交換をより行いやすいとの声が多く聞かれた。

次にパートナーの人種が与える影響について見ていく。パートナーがスイス人である家庭では、そうでない家庭に比べ、親戚や古くからの友人が近くに住んでいることが多く、スイスに来た当初はパートナーに連れられて参加したパーティーなどで知り合いを作ることが多いようである。ただし、KさんやRさんのようにパートナーの家族の中には高地ドイツ語を話さない人もおり、必ずしもパートナーが外国人であるからといってその家族や仲間誰とでも交流ができるわけではない。また、A、B、Cさんへのインタビュー内であったように、仕事仲間との交流は薄いようだ。スイス人は日本人と比べてプライベートと仕事を区別する文化のため、夫の仕事仲間とのパーティーはそこまで開催されていないという回答が多かった。また、結婚相手がスイス人以外で子供がいる人の中には、近所に義父母が住んでいれば子供を預けて友人と出かけることができ、交流の輪が広がったのではないかと感じている人がいた。また、地域住民との交流とは論点がずれてしまうが、パートナーがスイス人でない場合、役所関係の手続きなどを自ら行わなければならないことを不便に感じるという声が多く聞かれた。ただし、結婚相手がスイス人であっても相手が仕事で忙しく、結局自らの手で手続きをする必要があるようだ。また、子育てをする中では日本人夫婦の方が子育て上の情報を持っていることが多いようだ。

## (2) 言語レベルについて

語学力が地域住民との関わり方に対して与える影響を見ていく。今回のインタビューに応じてくださった方の語学力は以下のように分類できる。(ただし、語学力が不明の方は除く。また、レベルについては本人の自己申告や筆者の主観に基づく)

表 6 語学力に応じたインタビュー対象者の分類

英語は話せるが、ドイツ語は話せない	Mさん、Rさん、Sさん
ドイツ語を話すことができる (挨拶程度)	Jさん、Oさん、

ドイツ語を話すことができる（高度な会話が可能）	Bさん、Cさん、Eさん、Lさん、 Pさん
スイスドイツ語を話すことができる	Aさん、Kさん、Nさん、Qさん

上記の分類をもとに各人の話を振り返る。ベルンでは、日本において一般的にドイツ語を指している高地ドイツ語ではなく、ベルンドイツ語が現地語として使われている（公用語は高地ドイツ語）。ベルンドイツ語を含むスイスドイツ語は話し言葉であり、文法などが存在しない。そのため、勉強するのが非常に困難な言語である。ただし、スイスにおいて読み書きは高地ドイツ語で行われている。

語学力について、今回のインタビューの中で友人を作るには非常に重要な要素だと感じるとの声が多かった。まず、ドイツ語を話すことができるかどうかは交友関係だけでなく、日々の生活や在留資格にまで影響するところであった。例えば、子育ての場面においては学校で行われる三者面談がドイツ語で行われるため、ドイツ語を話せる日本人を通訳として呼ばなければならないこと、役所や銀行などで手続きを行う際にもコミュニケーションがうまく取れないと言ったことを不自由な点として上げていた。これに対してドイツ語を話せる人たちは英語のみ話せる人たちに比べると生活をする中の不自由さや人との交流の難しさはいささか軽減されているようだ。一方でドイツ語を話せる場合であっても、スイスドイツ語を話すことができるかどうかは交友関係に大きな影響を与えているようだ。AさんやKさん、Qさんのようにスイスドイツ語を話せる場合、高地ドイツ語しか話せない人に比べて交友関係が広い。これはスイスドイツ語を話せる方が職を見つけやすく、職場での交流関係も広げることができること、ベルンに暮らすスイス人は高地ドイツ語、英語を問題なく使用することが可能であるものの、OさんとPさんへのインタビュー内に出てきたように、スイス人は高地ドイツ語に対してコンプレックスを感じているために話しやすいスイスドイツ語でのコミュニケーションをより好むことが理由として考えられる。Kさんはスイスドイツ語を話せるようになる以前は周囲の人と高地ドイツ語で会話をしてきたが、これについてKさんは引け目を感じていた。

多くの人は、スイスは「言葉の壁」が厚いと感じていた。Qさんのようにスイスドイツ語も話せる人は、スイスドイツ語ができるからこそ「壁」がなくなり付き合いが多いと感じていた。

### （3）スイスに来た時期、年齢

スイスに来た時期や年齢が地域住民との関わり方に対して与える影響を見る。まず、スイス在住年数に応じてインタビュー対象者を分類したものが下の表である。この表に基づいて各人の話を振り返っていく。



表 7 スイス在住年数に応じたインタビュー対象者の分類

2 年未満	S さん
2 年以上 10 年未満	O さん、R さん
10 年以上 20 年未満	B さん、C さん、D さん、E さん、F さん、H さん、 I さん、J さん、M さん、P さん
20 年以上	A さん、G さん、K さん、N さん、Q さん

まず、今回のインタビュー調査においてもっとも多く的人数が属しているのが 10 年以上 20 年未満のグループである。これは、インタビュー対象者の多くが日本語教室に通う年齢（7 歳から 10 代前半）子供を持つ家庭が多いことが原因であると考えられる。インタビューの結果を振り返ってみると、在住年数が長いほど交友関係は広い傾向が見られた。これは長く居住すればするほど、人と出会う機会が増えることに加え、語学力が向上するためだと考えられる。このことは 20 年以上居住している人のほとんどがスイスドイツ語を使用できることから読み取れる（G さんの語学力は不明）。ただし、在住年数が短いからといって交友関係が狭いとは限らない。S さんの場合、スイスに来てから半年も経っていないにもかかわらず、子供の日本語教室での交流や趣味のお茶の教室を通じて交友関係を広げることができている。

また、高齢な人ほど日本人との接点が薄いこともインタビューを通じて判明した。これは、インターネットが盛んになる以前にスイスに来ており、日本人と繋がる接点が若い年代に比べると少ないことや、日本語教室設立以前に子供ができていたことが理由として考えられる。他にも、年齢が高い人の方が日本に帰りたいと思う気持ちが弱いように見受けられた。これについては、K さんへのインタビュー内でもあったように、スイスでの交友関係が深くなるとともに、日本の友人関係が希薄になっていることが日本に帰りたいと思う気持ちを弱めていると考えられる。

#### （4）居住地域

最後に、居住地域が地域住民との関わり方に対して与える影響を見る。今回のインタビューに応じてくださった方の居住地域を分類すると以下ようになる。ただし、引越しなどにより、居住地が変わってきた場合は複数地域に住んでいるとし、複数回カウントを行う。

表 8 居住地域に応じたインタビュー対象者の分類

ベルン市内	A さん、B さん、C さん、E さん、K さん、L さん、 M さん、N さん、Q さん、S さん
ベルン郊外	L さん
トゥーン及びその周辺	J さん、O さん、P さん
チューリッヒ	J さん、Q さん

今回のインタビュー対象者の居住地のなかで、ベルン市内とチューリッヒを都市部とし、ベルン郊外、トゥーン及びその周辺を地方と扱うことにする。

まず、都市部に暮らす人々と地域の関わり方について見ていく。スイスは移民国家であり、都市部には多くの移民が暮らしている。学校によっては生徒の多くが移民の子供であるケースもあり、子供のクラスメイトの母親が外国人であることは多い。インタビューの中で、これまで似たような経験をシェアしてきていることから、親が移民同士である場合は比較的交流が深まることが多いという声はよく聞かれた。また、Qさんが言っていたように、職場にも外国人が多いことから人付き合いがしやすい。それゆえ、Mさんのように英語しか話すことができない人であっても子供の学校を通じて他人と交流することが可能になっているのではないかと。また、地域住民との交流とは直接的に関係はないものの、都市部の方が同じ国出身の人が多いため、情報交換等が行いやすい様子が見受けられた。ただし、チューリッヒのような大都市の場合、Jさんが言っていたように在留資格の割り当て等の関係から同じ国出身同士だからと言って関係性がうまくいくとは限らない。これについてJさんはベルンにおいては同じような問題が起こっていないと言っていたが、ベルンに暮らす日本人の多くが結婚がきっかけでスイスに来ており、安定した在留資格を得られていることが原因だと考えることもできる。

その一方で、地方の場合は移民の数がそれほど多くないことに加え、代々その地に住んでいる人達が多く、Lさんの学校のように、母親同士が姉妹のケースや同好会の仲間同士であるケースが多い。また、インタビュー対象者間で比べた際に地方に暮らす人の方が被差別経験が多く、また、保守的であると感じる人が多い。このような中で、Lさんのようにすでに出来上がっている人の輪に入ることに抵抗感を示す人がいた。ただし、その一方でQさんのように周囲にスイス人しかいないことで、スイスドイツ語が上達し、その後の生活において交流の輪が広がるきっかけになった人もいた。ただし、地方の場合、語学学校が都市部に比べると少ないため、一定以上のレベルになると都市部の学校に行かなければならないこともあり、語学力の向上に完全に向いているとは言い切れない。

## 第5章 終わりに

本論文では、スイスに暮らす日本人移民がどのようにして地域社会に適応しているのか、どのようにして交流の輪を広げていっているのかインタビュー調査を通じてみる事ができた。

4章の結果を踏まえると、語学力や家族構成が地域との関係の構築に対して与える影響がとても大きいことが読み取れる。子供がいる家庭の場合、その多くが子供の習い事や学校を通じて知り合った親と交流することができ、結婚相手がスイス人である家庭では、そうでない家庭に比べ、親戚や古くからの友人が近くに住んでいることが多く、そこを通じて知り合いを作ることができる。また、居住地域の与える影響も大きいことがわかる。例えば、高い語学力を有する人であれば地方で暮らす場合であっても、比較的交友関係を広げることが可能であろう。その一方で語学力が低い人にとっては都市部で暮らすことで、語学学校や子供の学校を通じてドイツ語を話すことができない他の移民との交流を図ることができると考えられる。ただ、多くの人たちが日本語教室の存在に助けられる部分が多いことも読み取れた。日本語によってコミュニケーションをとれることに対して多くの人の方が便利さを感じるとともに、同じような経験をしてきていることから子育てや日々の暮らしに対する相談をし助言をもらい、困ったときには助け合う姿が見られた。また、日本語教室の存在は子供にとっても重要な意味を持っている。幼少期から通っているため、幼馴染のような関係になることが多く、子供達にとっては自分と似た境遇を持つ友人を得ることができる場ともなっている。その一方で、多くの方がインタビュー内で答えているように、地域住民との関わり方や差別の捉え方は、一概に分類することができないのも事実である。ポジティブな思考を持っている人の方がそうでない人に比べて日々の生活や交友関係に対して困難を抱えにくいことも読み取れた。

最後に、本論文の執筆にあたり、インタビュー調査にご協力いただいたスイスに暮らす日本人の皆様、誠にありがとうございました。

## 参考文献（注にあげたものを除く）

柿原武史「スイスにおける移民統合政策と言語サービスについて」『商学論究』、2020年  
67巻4号、pp.105-124

川口マーン恵美『世界一豊かなスイスとそっくりな国ニッポン』講談社、2016年

渋谷真樹「ドイツ語圏スイスにおける移民教育 -母語母文化教育を中心に-」『奈良教育大  
学紀要. 人文・社会科学』、2010年 59巻1号、pp.21-29

大喜祐太「ドイツ語圏スイスの標準語を決めるのは誰か」『言語科学論集』、2014年 第  
20号、pp.63-82

戸田典子「スイスの外国人政策と新しい外国人法」『レファレンス』、平成20年 5月  
号、pp.27-47

花田吉隆『スイスが問う日本の明日 近代化の中に忘れてきたもの』刀水書房、2018年

李恵珍「ドイツにおける外国人専門人材の受け入れと統合政策の変容」、公益財団法人  
日本国際交流センター編『ドイツの移民・難民政策の新たな挑戦—2016 ドイツ現  
地調査報告—』、2017年、pp.10-20

外務省「海外在留邦人数調査統計」、  
(<https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/index.html> 2021年1月31日  
閲覧)

日本貿易振興機構「国民投票でEU移民受け入れを制限するイニシアチブ否決」、  
(<https://www.jetro.go.jp/biznews/2020/10/5747704710bae2dc.html> 2021年1  
月31日閲覧)

Bundesamt für Statistik, *Ständige Wohnbevölkerung nach Staatsangehörigkeitskategorie,  
Alter und Kanton, 2. Quartal 2020.*  
[https://www.bfs.admin.ch/bfs/de/home/statistiken/bevoelkerung/stand-  
entwicklung.assetdetail.14027789.html](https://www.bfs.admin.ch/bfs/de/home/statistiken/bevoelkerung/stand-entwicklung.assetdetail.14027789.html) (2021年1月31日閲覧) .

Federal Statistical Office, *Population*.

<https://www.bfs.admin.ch/bfs/en/home/statistics/population.html> (2021年1月31日閲覧) .

Kanton Bern, *Bevölkerungsstatistik*.

<https://www.fin.be.ch/fin/de/index/finanzen/finanzen/statistik/bevoelk.html>  
(2021年1月31日閲覧) .

Secrétariat d'État aux migrations, *Statistique 2019 relatives aux étrangers*.

<https://www.sem.admin.ch/sem/fr/home/aktuell/news/2020/2020-01-30.html>  
(2021年1月31日閲覧) .

Swissinfo.ch 「スイスの主要統計」、

(<https://www.swissinfo.ch/jpn/%E3%82%B9%E3%82%A4%E3%82%B9%E3%81%AE%E4%B8%BB%E8%A6%81%E7%B5%B1%E8%A8%88/31316038>  
2021年1月31日閲覧)